

[ 資料紹介 ]

## 帝国のあいだで、スクリーンの上で： 中露国境河川流域におけるロシア・コサック\*

ゾーレン・ウルバンスキー、斎藤 祥平

(郡司 憶人 訳)

はじめに

たき火にかけられた鉄鍋の中でコトコトと煮立つお粥が映し出される。ロシア風の農村で、大人や子供が料理をする中国人を囲むようにして座っている。ロシア人たちの楽しそうな雰囲気釣られて、調理中の中国人も頬を綻ばせる。が、突然、彼はカメラに向かって深刻な眼差しを向ける。直後、再び画面が切り替わり、ロシア系農民たちが映し出される。照りつける太陽の下で汗をかきながら、箸やスプーンを使ってせつせと昼食を口に運んでいる。手前には馬が一頭、奥には牛が二頭見える。牛車に引かれた刈り取り機が刃を回転させながら畑の上を進んでいき、その横では子供たちが一生懸命に手で藁を束ねている(附録のステール写真、第一部左下を参照)。一見すると、この映像はロシア革命以前の南ロシアあたりで撮影されたような印象を受ける。たとえばヴォルガ川下流の牧草地域だと言われれば、つい納得してしまいそうになる。しかし、繰り返し感じる違和感が、こうした印象が誤りであることを伝えてくる。なぜヴォルガ川沿いのロシア農村に中国人がいるのだろうか。伝統行事のシーンで馬に乗って行進するコサックたちは、なぜロシア国旗に加えて、満洲国の国旗を掲げているのだろうか<sup>(1)</sup>。

この映像はどのようにして製作され、現在まで保管されてきたのか。実はこれは、1930年代に満洲映画協会によって撮影されたもので、画面に映し出されるロシア系農民は、今日我々が「中国東北部」と呼ぶ地域のうち、ソ連ザバイカリエ地方に程近い北西の辺境地で

\* 本稿は、Sören Urbansky, “Der Kosake als Lehrer oder Exot?: Fragen an einen Mandschukuo-Dokumentarfilm über die bäuerliche russische Diaspora am Grenzfluss Argun,” Martin Aust and Julia Obertreis, eds., *Osteuropäische Geschichte und Globalgeschichte* (Stuttgart: Steiner, 2014), pp. 103–127 を郡司憶人が翻訳し、雑誌『境界研究』への投稿に際し、原著者ゾーレン・ウルバンスキーから提案を受けた斎藤祥平が加筆・修正と追加の翻訳を行ったものである。なお、注記における出典等はオリジナル表記のままとした。

(1) 種々の有益な指摘をくださったトーマス・ラフーセン氏、貴重な資料を提供してくださったアレクサンダー・クリャウス氏、建設的な助言をくださった匿名の査読者の方々、本稿の投稿プランについて詳しい助言をいただいた『境界研究』編集部の方々に厚くお礼を申し上げたい。また、株式会社ケー・シー・ワークス様よりステール写真の使用許可をいただいた。ご協力に感謝したい。

伝統的な生活を営むコサックであった<sup>(2)</sup>。ガン川、デルブル川、ハウル川の三河川に囲まれた同地域は中国や日本では「三河」の地名で知られ、コサックたちからも同様に、ロシア語で「三つの川の土地」を意味する「トリョフレチエ(Trekhrech'e)」の名で親しまれた。土地面積は秋田県とほぼ同程度の11,500平方メートルで、ザバイカリエ地方や満洲地方の基準に照らすと非常に小規模な地域である。現在の地図で言えば内モンゴル自治区の北東部に位置し、行政上はフルンボイル市(ロシア語名:バルガ)に帰属している。北部にはシベリア特有の針葉樹林帯、南部にはフルンボイルの広大な牧草地帯、東部には大興安嶺山脈という天然の境界に囲まれていたことから、長きに渡って中国や満洲地方の中心部との社会・文化的、経済的、民族的交流が希薄だった。一方、西側の境界は、大興安嶺山脈から西へ流れ出た三河川が合流する露中国境沿いのアルグン川だったが、同河川は冬期には完全凍結するため徒歩での渡河が可能であり、また浅瀬や小島が多いことから、雪解け後の夏期も移動上の困難が少なかった。こうした特殊な環境が背景となって、ロシアから同地に移り住んだコサックは、ロシア本土ではソ連の成立とともに過去のものとなった伝統的な農業生活を1920年代以降も営みつづけた。そして1937年8月、日本によって設立された満洲映画協会が彼らの生活を撮影し、上記映像が製作された。図1は、1930年代のフルンボイル地方の地図である。その後、第二次世界大戦末期にソ連による満洲侵攻が始まると、新京(現在の長春)に設置されていたスタジオも略奪に遭い、同映画は1945年に戦利品の一部としてモスクワへ送られたという。以降、ソ連公文書館の機密資料として半世紀に渡って保管された後、90年代中頃に「再発見」され、テン・シャープ(東京)とロシア国立映画保存所(ゴスフィリモフォンド)によって他の満映作品とともに全30巻のビデオテープの形で公開された<sup>(3)</sup>。稿末の附録にあるのは本映画のスチール写真の一部である。

この追跡調査が示唆するように、このコサック映画が歴史家に伝えるのはトリョフレチエという一辺境地のローカルな情報に留まらない。たとえば、踊り手、観客、アコーディオン、踊り手、観客、アコーディオンと次々と画面が切り替わっていく伝統行事のシーン

(2) 今日「中国東北部」の名で呼ばれる地域を示すにあたり、本稿は原則として「満洲地方」、1932年から1945年の期間については「満洲国」の用語を用いる。これらの語が有する歴史的、あるいは政治的な(イデオロギー的な)問題点について筆者は十分に自覚的だが、ここではその詳細には立ち入らず、以下の関連文献を指摘するに留める。Mark C. Elliott, “The Limits of Tartary: Manchuria in Imperial and National Geographies,” *The Journal of Asian Studies* 59, no. 3 (2000), pp. 604–607; Mariko Asano Tamanoi, “Introduction,” Mariko Asano Tamanoi, ed. *Crossed Histories: Manchuria in the Age of Empire* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2005), pp. 2–3.

(3) 『満洲の記録：映像の証言』テンシャープ、1994年。日本では上智大学、立命館大学、琉球大学の附属図書館に所蔵されている。なお、現在日本における映像の使用権は株式会社ケー・シー・ワークスに渡っており、映像は『思ひでの満洲』ケー・シー・ワークス、2005年に収録され、DVDとして購入可能である。満洲映画協会作品の全体像については以下の文献を参照されたい。Michael Baskett, “Goodwill Hunting: Rediscovering and Remembering Manchukuo in Japanese ‘Goodwill Films’,” Tamanoi, ed. *Crossed Histories*, pp. 120–121; Thomas Lahusen, “Dr. Fu Manchu in Harbin: Cinema and Moviegoers of the 1930s,” *The South Atlantic Quarterly* 99, no. 1 (2000), p. 161; また、日本における研究史については、池川玲子『『満洲映画協会』研究史の整理と今後の展望』『Image & Gender』7号、2007年、99–103頁。

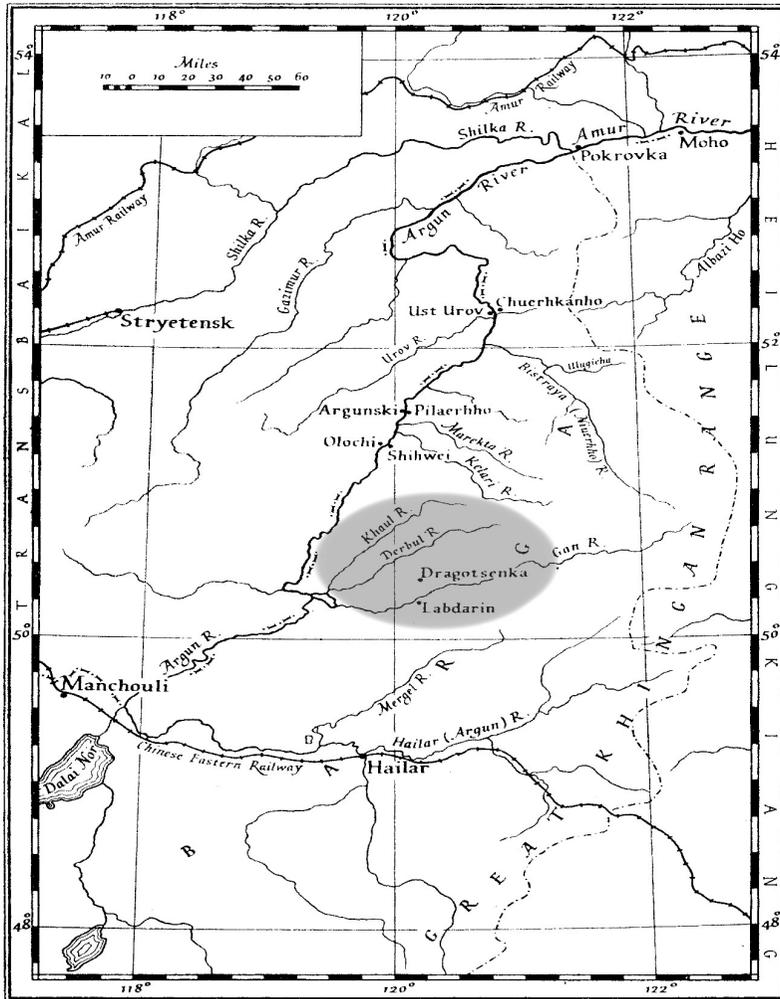


図1 1930年頃のフンボイル地方 地図上のグレー部分が三河地域

出典：E. J. Lindgren, “North-Western Manchuria and the Reindeer-Tungus,” *The Geographical Journal* 75 (1930), p. 520.

の撮影手法などは、セルゲイ・エイゼンシュタインやフセヴォロド・プドフキンに代表されるソヴィエト・アヴァンギャルドを彷彿とさせ、映画が国家や文化の枠組みを超えた芸術形態であることを改めて痛感させる<sup>(4)</sup>。このような意味で、満洲国内で日本人スタッフによって撮影されたロシア・コサック映画は、トリョフレチエという一地域のミクロな歴史と、日本、中国、ロシアという東北アジアにおける大国の帝国主義競争というマクロな歴史の交差点をなしていると見ることができる。

なかでもコサック映画は、以下の二つの点で、とりわけこうした研究目的に適っている

(4) 満洲映画協会の各スタッフの政治的立場および民族的出自の多様性については次の記述を参照されたい。  
Baskett, “Goodwill Hunting,” p. 125.

と言える。第一に、同映像が撮影された満洲地方は、それ自体が帝国主義の象徴とも言える存在である。清朝を建国した満洲族がその起源を有したことから「満洲」の名で呼ばれるようになったこの地域は、19世紀中頃までは中国の中心部から隔絶された人口の希薄な土地であったが、20世紀に入って以降、周辺諸国の拡大政策を背景に急速に開拓が進み、たとえば帝政ロシアの南進政策の中核を担った東清鉄道の路線が敷設拡大され、1932年には日本による傀儡政権が樹立された。東清鉄道の拠点が置かれたハルビン市はロシアの植民地としての性格を色濃く有した鉄道都市として発展し、1917年のロシア革命以降は中国だけでなくロシアからも大量の移民が押し寄せたことで、異文化が渾然一体となった近代都市へと変貌を遂げた。満洲地方が脱植民地化を果たし、中華人民共和国の不可分の国土として承認を受けるのは、ようやく第二次世界大戦が終結して以降のことである。第二の理由は、一地方のローカルな文化が国境を越えて伝達される過程において、移民やディアスポラが果たす役割が極めて大きい点に求められる<sup>(5)</sup>。事実、20世紀前半の満洲、とりわけ前述のハルビンの歴史は、移民史や文化史を牽引するテーマである<sup>(6)</sup>。問題のコサック映画は、まさにこうした帝国主義と移民の歴史の産物であると見ることができる。

欧米でも、トリョフレチエのコサックについてはすでにいくつかの先行研究が見られるが、中国に暮らすわずか数千のロシア系農民という特殊性を重視した地域史研究の域に留まるのではなく、より大きな枠組みで同テーマを論じていく余地がある<sup>(7)</sup>。例えば、日本では伊賀上菜穂や阪本秀昭の研究グループを中心に近年「三河コサック」についての体系的な研究が進んでいる<sup>(8)</sup>。とりわけ伊賀上の一連の論考では満洲国時代に日本語で作成された三河コサックに関する映画、文学作品、様々な雑誌や書籍に掲載された資料

(5) こうしたテーマは、ドイツ語圏においては *transkulturell*、*transnational*、あるいは *translokal* といった概念を用いて論じられる。これらの概念の定義に関する議論については、以下を参照されたい。Melanie Hühn et al., “In neuen Dimensionen denken? Einführende Überlegungen zu Transkulturalität, Transnationalität, Transstaatlichkeit und Translokalität,” Melanie Hühn et al., eds., *Transkulturalität, Transnationalität, Transstaatlichkeit, Translokalität: Theoretische und empirische Begriffsbestimmungen* (Berlin: Lit, 2010), pp. 13–17.

(6) たとえば以下の文献を指摘することができる。Rosemary Queded, “*Matey*” *Imperialists? The Tsarist Russians in Manchuria, 1895–1917* (Hongkong: University of Hong Kong Centre of Asian Studies, 1982); David Wolff, *To the Harbin Station: The Liberal Alternative in Russian Manchuria, 1898–1914* (Stanford: Stanford University Press, 1999) (邦訳: デイビッド・ウルフ著、半谷史郎訳『ハルビン駅へ: 日露中・交錯するロシア満洲の近代史』講談社、2014年); James Carter, *Creating a Chinese Harbin: Nationalism in an International City, 1916–1932* (Ithaca: Cornell University Press, 2002); Blaine Chiasson, *Administering the Colonizer: Manchuria’s Russians under Chinese Rule, 1918–29* (Vancouver: UBC Press, 2010).

(7) トリョフレチエ・コサックの生活に関する特に詳細な記述として、たとえば次の文献が挙げられる。Iuliia Argudiaeva, “Russkoe Naselenie v Trekhrech’e,” *Rossia i ATR*, no. 4 (2006), pp. 121–134 (邦訳: ユリア・アルグジャーエヴァ著、伊賀上菜穂訳『ロシア側資料に見る三河コサック村の生活』阪本秀昭編『満洲におけるロシア人の社会と生活: 日本人との接触と交流』ミネルヴァ書房、2013年、184–196頁); また民族学的視点からトリョフレチエ・コサックの文化について扱った最新の研究として、次が挙げられる。Vladimir Kliaus, “*Russkoe Trekhrech’e*” *Man’chzhurii: ocherki fol’klora i traditsionnoi kul’tury* (Moscow, IMLIRAN, 2015).

(8) 2013年に刊行された阪本による編著は広く満洲のロシア人の社会・生活について多彩な視点から分析している。阪本編『満洲におけるロシア人の社会と生活』(前注7参照)。

の調査をもとに、日本人とコサックの関係や日本人が抱いたコサック観が分析されている<sup>(9)</sup>。本稿が主題とする映画『三河』に、日本人がコサックに対して抱く主要なイメージであった「軍人」、「農民」、「自由の民」、「ディアスポラ」が盛り込まれているという鋭い指摘、なかでも「自由の民」のイメージは映画『三河』の中で、彼らの娯楽志向や楽天的な生き方として描かれ、コサックがソ連や中華民国の支配を逃れ、満洲国の庇護下で安らぎを得ていることを示すものであったという議論は、本稿の結論の一部を補強するものである<sup>(10)</sup>。日本の「満洲映画協会」研究に目を向けると、ロシアで出現したフィルム素材を歴史的政治的背景とともに分析する超域的研究、国際的な共同研究が残された課題として指摘されている<sup>(11)</sup>。

本稿は、こうした研究状況を受けて、問題の映画が撮影されるに至った背景を、ロシア語の資料を用いながら、特に帝国主義と植民地主義という観点からさらに掘り下げるものである。そこで第1章ではまず、中国北部の国境地域にロシア人コミュニティが形成される過程を確認する。続いて第2章では、周辺の帝国との関係から生じた彼らの特殊なアイデンティティを取り上げる。一見すると彼らは伝統的な文化や慣習を維持しているものの、その生活は常に、日本、ロシア、中国、あるいは1920年代に奉天(現在の瀋陽市)を根城に満洲全域で権勢を振るった地方軍閥、そして1930年代には新京(現在の長春市)に設置された満洲国政府との利益の狭間で揺れ動いた。国境を超えて中国へと移民したことによって経験することとなったこうした波乱は、彼らのアイデンティティ形成にどのような影響を与えたか。第2章はこの点を明らかにする。そして第3章では、満洲映画協会の日本人映画スタッフが同映画を製作した動機を考察する。彼らはなぜ、満洲国北辺の小さな共同体に暮らすコサックに関心を向けたのだろうか。

## 1. 露中国境地域におけるロシア・コサックコミュニティの誕生と発展

中国領内に暮らすコサックの歴史は、17世紀中頃まで遡ることができる。拡張政策を進める帝政ロシアと、その中国北部への進出を警戒した清朝(1644-1911)政府によって、1689年にネルチンスク条約が結ばれ、アムール川(黒龍江)およびアルグン川が露中国境として確定したが、ロシアはその後も国境警備のため武装農民コサックの派遣を継続し、彼らのための居住区設置を推進することで、国境地域における影響力を着々と拡大した<sup>(12)</sup>。シベ

(9) 伊賀上菜穂「日本人の三河コサックイメージ：1930年代～1945年の日本語資料の分析より」『セーヴェル』27号、2011年、31-50頁；伊賀上菜穂「日本人が見た三河コサック村」阪本編『満洲におけるロシア人の社会と生活』、159-183頁。

(10) 伊賀上「日本人の三河コサックイメージ」、37-40頁。

(11) 池川「『満洲映画協会』」(前注3参照)、102頁。

(12) トランスバイカル地方のコサックの歴史については、今日でも次の文献が最も詳しい。Aleksandr P. Vasil'ev, *Zabaikal'skie Kazaki. Istoricheskii ocherk*, vol. 1-3 (Chita: Tipografiia Voiskogo Khoziaistvennogo Pravleniia Zabaik. kaz. voiska, 1916).

リアに追放された政治犯、豊かな土地を求めた農民をはじめとするロシア人たちが国境を越えて亡命し、中国領内に共同体を形成しはじめた<sup>(13)</sup>。ネルチンスク条約で定められた長大な露中間の国境線が実際的な意味を獲得するのは、20世紀に入って以降のことであった。

ロシア人による以上のような中国進出が可能になった背景には、清朝政府は自らの出自たる満洲地方に漢民族が大量に流入することを好まず、北部地域への積極的な移民政策を行わなかったことがあった<sup>(14)</sup>。1911年の辛亥革命後に樹立された中国新政府は、中心部での混乱を鎮圧し中央の統治体制を整えるのにしばらくの時間を要したため、新政府が漢民族系の役人を地方に再派遣し、厳格な国境管理を実現することに成功したのは、革命後10年近くが経過した後のことであった。フルンボイル地方について見れば、1915年に部分的な統治体制が確立され、1920年に入ってようやく、完全な形での管理制度が導入された<sup>(15)</sup>。

中国側での厳格な国境管理が開始されたにもかかわらず、20世紀に入って以降もトリョフレチエのロシア人コミュニティが発展を遂げることができた理由は、主としてロシア革命に求めることができる。1914年に第一次世界大戦が勃発して以降、多くのロシア人が西方での動乱から逃れて東部へと避難した。こうした流れの中で、トリョフレチエにも四度の大規模な移民の波が押し寄せた。第一の移民集団は、正確には移住者ではなく、すでに何世代にもわたり夏期になると中国領に渡って農業を営んでいたコサクたちだった。第一次世界大戦が勃発すると、彼らの多くは動乱に揺れるロシア本土へと帰郷することを好まず、冬が訪れてもそのまま中国領に残ることとなった。ロシアが第一次世界大戦から撤退し、赤軍と白軍の間での内戦が勃発すると、本格的な移民が開始された。第二の波となってトリョフレチエに押し寄せたのは、家族や家畜を連れて祖国を離れたトランスバイカル地方東部の住民たちだった。彼らの大部分は、内戦は間もなく終結し、すぐに故郷に戻れるだろうという期待を抱いていたため、当初はロシア語でゼムリャンカ(*zemlianka*)と呼ばれる簡易な竪穴式住居を作って暮らしたものの、内戦の長期化によって同地に留まることを余儀なくされた。第三の移民集団がトリョフレチエに押し寄せたのは1930年以降のことである。彼らは時期にちなんで「トリツァットニキ(*Tritsatniki*、30年代野郎)」と呼ばれた。引き金となったのは、スターリン政権下のソ連が1929年末から開始した強制的農業集団化政策で、同政策の規模を反映して、第三の移民の波は数の上で圧倒的な規模を誇った。ほぼ時を同じくしてトリョフレチエへと移住してきた第四の波を形成したのは、主として東清鉄道の元職員たちであった。社会主義革命やそれに続く内戦によって経営機能が

(13) 同地域の天候、地質、植物層、動物層、農耕および狩猟については、トロント在住のオルガ・バキッチ女史個人蔵書中の以下のタイプ文書に詳しい。V. N. Zhernakov, *Trekhtrech'e*, unpublished manuscript (Oakland, CA: n.d.), pp. 6–15; Ethel J. Lindgren, “North-Western Manchuria and the Reindeer-Tungus,” *The Geographical Journal* 75, no. 6 (1930), p. 530. また、同地域の酪農については坂本「三河地方の製酪消費組合」坂本編『満洲におけるロシア人の社会と生活』(前注7参照)、197–219頁。

(14) V. A. Kormazov, *Barga. Ekonomicheskii ocherk* (Harbin: Tip. Kitaiskoi Vostochnoi zheleznoi dorogi, 1928), pp. 10–13.

(15) Kormazov, *Barga*, pp. 13–17.

麻痺していた東清鉄道は社員の大量解雇を余儀なくされ、職を失ったロシア人元職員たちが、赴任地のハルビンや満洲北部の過疎地を離れ、トリョフレチエのロシア人コミュニティへと移住したのである。以上のような四度の大規模な集団移民を経て、トリョフレチエはいわば、辺境コサックの農業地から政治的被迫害者のための亡命地へと変貌を遂げたのである。統計資料によれば、満洲国統治期(1932-1945)のトリョフレチエではロシア系住民が全人口の80パーセントを占めており、ロシア革命以降の人口構造の劇的な変化が如実に表れている(表1参照)<sup>(16)</sup>。

こうした発展の結果、満洲国統治下のトリョフレチエには、ドラゴツェンカを中心とする21の農村が成立し、ロシア人コミュニティの確固たる基盤が確立された<sup>(18)</sup>。同地域の自作農家は早いものでは1880年代から見られたとされるが、統計資料を見ると、1930年代初頭のトリョフレチエの共同体は今なお極めて小規模であったことが分かる。たとえ

表1 トリョフレチエ民族別住民統計(推定)<sup>(17)</sup>

年	総人口	人口密度 (km <sup>2</sup> )	ロシア人	漢民族	その他
1928	2,330	0.2	2,130	200	—
1933	—		5,519	—	—
1945	約 13,100	0.9	約 11,000	約 1,100	約 1,000
1955			約 3,000		
1972			23		
1990	約 50,000	4,3	民族的ロシア人 1,748 混血 3,468		

出典：脚注17にある資料を参照し筆者作成。

(16) Argudiaeva, “Russkoe Naselenie v Trekhrech’e,” (前注7参照), p. 122; A. M. Kaigorodov and V. Perminov, “Zemlia za Argun’iu, Kratkii istoricheskii ocherk,” *Edinienie*, 04.07.1997, pp. 5-7; Kormazov, *Barga*, pp. 48-50.

(17) 史料により、用いられている民族のカテゴリーおよび調査地の範囲が異なるため、同表における各年代の住民数は、あくまで推定のものに留まる。1928年については次の文献に従った。Kormazov, *Barga*, pp. 50-51. 1933年の数値については次の文献の記述に依拠した。V. A. Anuchin, *Geograficheskie ocherki Man’chzhurii* (Moskva: Gos. izd-vo geogr. lit-ry, 1948), p. 179. なお、同著者は、前述のKormazovによる調査を参照している。1945年の数値は次の文献に依った。Argudiaeva, “Russkoe Naselenie v Trekhrech’e” (前注7参照), p. 126. 1955年および1972年は以下の文献の記述に従った。Zhernakov, *Trekhrech’e*, p. 4. 1990年の数値は次の文献を参照した。E’erguna you qi shi zhi bianzuan weiyuanhui, ed., *E’erguna you qi zhi* (Haila’er, 1993), pp. 106, 127. ただし、ここで民族的ロシア人の住民数が大幅に増えている点については留意が必要である。たとえば近年の中国では新生児の登録や学問・教育部門で少数民族が優遇されている結果、登録上の少数民族が増加傾向にあることが知られている。中国における少数民族に対する措置には恣意的な側面が多く、上述の増加傾向も、実態よりも、あくまで少数民族に対する優遇措置を反映したものであると見るべきだと思われる。

(18) このうち、特に重要度の高いいくつかの農村については、以下の文献で詳しく取り上げられている。Zhernakov, *Trekhrech’e*, pp. 16-17; Argudiaeva, “Russkoe Naselenie v Trekhrech’e” (前注7参照), pp. 123-126.

ば、当時のドラゴツェンカの人口は、中国人30人を含む僅か450人であった。しかし、続く約10年間の間に、同市の人口は日本人500人、中国人1,000人、ロシア系住民1,500人からなる約3,000人まで増加している。このドラゴツェンカは、地理的にトリョフレチエの中央部に位置し、また南方のハイラル地方とトリョフレチエの村々を連結する道路に近接していたことから、文化的、経済的にも同地方の中心部として発展し、警察・憲兵組織の本署および関東軍支部が置かれた他、近隣には300名の兵士からなる守備隊も設置され、同時に同地方唯一のコサック首長の居住地として、その他の農村を管轄していた。ロシア系のチューリン株式会社をはじめとした商店や企業がこぞって支店を開き、水力発電所、蒸気製粉所、植物油製造所、乳製品製造所、郵便局、電報局、銀行支店といった近代的インフラが一つずつ設けられた他、馬具店や革・フェルト製品や自動車の工場なども多く見られたという。ドラゴツェンカの人口の三分の一を占めた中国人たち<sup>(19)</sup>は主に小売店、床屋、仕立屋などに雇われるか、あるいは自ら小料理店を営んで生計を立てており、こうした中国系住民の多さを反映して、教育面ではロシア人のための初等・中等教育施設に加えて、中国人向けの学校も設置されていた。また、ドラゴツェンカには白系ロシア人協会の本部が設立された他、1936年から1942年にかけては、満洲国白系露人事務局のドラゴツェンカ支部によって、週刊新聞「コサック生活」も発行されていた<sup>(20)</sup>。

様々な史料が、トリョフレチエのロシア系住民がトランスバイカル地方の本来の故郷での生活慣習を維持していたことを示している。たとえば、真直ぐで幅のある道や、庭、納屋、家屋、そして玄関を南向きに備え、床を黄土色に塗装したカラマツ材の丸太小屋などは、トランスバイカル地方の村の様子と寸分違わない。また、家具の配置を描写した文献には、

通常、庭と家の出入り口の間には廊下が設けられており、玄関を入るとすぐにロシア式のオープンが迎え、その右の壁際には正教会のイコンが飾られている。玄関側の壁に設けられた窓の間には机が置かれ、三つの窓のうち二つからは玄関前の前庭を、残る一つからは庭を見渡すことができる。最初の部屋と次の部屋の間にはストーブが設置されており、二つ目の部屋も同様に、三つある窓のうち二つからは前庭が、残り一つからは庭が見えている。そして窓際にはソファと椅子が並び、左のスペースにはベッドと暖房が置かれている。<sup>(21)</sup>

とあり、屋内でもトランスバイカル地方の伝統的なスタイルが貫かれていたことを示して

(19) トリョフレチエの21の農村のうち、大部分にはロシア人のみが暮らしていた。たとえばヴェルフ・ウルガ村には「二人の中国人が経営する小さな雑貨店が一軒あっただけで、残りは全員ロシア人」だったという。筆者によるイヴァン・ソコロフとのインタビュー（アバガイトウイ、2009年8月4日）。

(20) Zhernakov, *Trekhrech'e*（前注13参照）, p. 16; Argudiaeva, “Russkoe Naselenie v Trekhrech'e”（前注7参照）, pp. 125–126; M. Shestakov, “Blagodatnoe Trekhrech'e,” *Vestnik Kazach'ei Vystavke v Kharbine 1943 g. Sbornik statei o kazakakh i kazachestve* (Harbin, n.p. 1943), p. 193. 満洲国白系露人事務局については脚注34も参照されたい。

(21) Zhernakov, *Trekhrech'e*（前注13参照）, p. 17; Anuchin, *Geograficheskie ocherki Man'chzhurii*（前注17参照）, p. 179.

いる。信仰や伝統についても同様で、祭りの日になると、トリョフレチエのロシア人たちはコサックの伝統的衣装を纏って陽気に飛び跳ねた。また、同地にはドラゴツェンカのペトロ・パヴロフスク大聖堂のほか、さらに九つの教会と一つの修道院が存在した。招魂祭の日が来ると、彼らは死んだ先祖たちが帰ってきたかどうかを確認するために家の廊下に薄く小麦を巻き、聖神降霊祭の月曜日には飼馬の体軀を洗って祝福するなど、ロシア革命後のソ連では失われてしまった正教会の伝統が、連綿と受け継がれていた<sup>(22)</sup>。言うなればトリョフレチエはトランスバイカル地方の一部を切り取ってそのまま中国に移した「箱庭」のような存在であった。1940年代に同地を訪れたソ連の専門家の一人は、その際に覚えたタイムスリップをしたかのような奇妙な感覚を、「この土地における生活様式は、遠く離れたトランスバイカル地方の、帝政ロシアの時代のそれと何ら変わらない。このバルガ地方の一地域は、ソ連人にとってさながら博物館のような印象を与えてやまない」という文章で表現している<sup>(23)</sup>。

## 2. 中国、ソ連、日本・満洲国のあいだのアクター

しかしながら、トリョフレチエのコサックたちが伝統的な生活慣習を維持していたことを理由に、長閑で牧歌的な農民生活を想像するのは誤りである。かつてロシア帝国の版図拡大を最前線で担ったコサックたちは、川を超えて対岸へ亡命して以降、中国、ソ連、そして1932年以降は日本・満洲国の帝国主義競争の狭間で翻弄されることとなった。冒頭で紹介した満洲映画協会の作品もまた、満洲地方における帝国主義の歴史という文脈の中で解釈する必要がある。そこで以下では、同作品を分析するための土台として、トリョフレチエ・コサックと帝国主義の関係と、それがもたらした彼らの特殊なアイデンティティを、簡潔に通観する。

ロシア革命以降トリョフレチエには多くのロシア人が移住したが、そこは決して彼らにとっての安住の地ではなかった。革命から三年が経過し1920代を迎えると、内戦の趨勢が決しはじめた事によってロシア白軍の敗残兵やパルチザンが東部へと流入し、トランスバイカル地方の村々は深刻な被害に晒された。トリョフレチエも同様に激しい略奪に遭い、家屋は火にかけられ、多くの住民が命を落とした<sup>(24)</sup>。このような状況の中でも同地の農村が存続できた理由の一つは、コサックたちが独自に作り上げた自治システムの存在であった。彼らは各村に村長を置き、それをさらにシュチェ村に起居する全村の代表者が統括するという制度を確立し、さらには同じくシュチェ村に居を構えた中国人地方官からの信任を得る事にも成功した<sup>(25)</sup>。しかしながら、1920年代も後半に入ると、中国政府はロシア系

(22) Zhernakov, *Trekhrech'e* (前注13参照), pp 18–21; E'erguna, ed., *E'erguna you qi zhi* (前注17参照), pp. 128–134.

(23) Anuchin, *Geograficheskie ocherki Man'chzhurii* (前注17参照), p. 122.

(24) Argudiaeva, "Russkoe Naselenie v Trekhrech'e" (前注7参照), p. 122.

(25) Zhernakov, *Trekhrech'e* (前注13参照), p. 3.

移民に対する管理制度を政治的、経済的、文化的、あらゆる側面で徐々に強化し、旅券制度の導入、税金の徴収、正教上の祝事の禁止などを実施した。1926年には、トリョフレチエを訪問したハルビン大主教が同地で抑留されるという、管理体制の厳格化を象徴的に示す出来事が起きている<sup>(26)</sup>。

1920年代末期にソ連と満洲地方の軍閥政権の関係が悪化すると、その影響は直ちにトリョフレチエ・コサックにも及んだ。1928年、暗殺された父・張作霖の跡を継いだ張学良は、第一次国共合作以降盛り上がりを見せていた中国ナショナリズムに後押しされる形で、日本のみならずソ連に対しても抵抗の姿勢を見せ、当時ソ連権益であった東清鉄道の武力回収へと乗り出した。一方、時を同じくして中国の国境地域では、同地に亡命したロシア白軍の残党勢力が、ソ連領土および国家政治保安部(GPU: Gosudarstvennoe politicheskoe upravlenie、ソ連秘密警察のこと)の下部組織である国境警備隊に対して断続的に襲撃を繰り返していた。権益と国境を巡るこれらの争いは、ソ連に対して中国へ直接的軍事介入を行う絶好の機会をもたらした。1929年8月以降、ソ連赤軍は数回に渡る討伐作戦を開始し、これはいわゆる中ソ紛争へと発展した。この紛争は、わずか三カ月後の1929年11月にソ連の一方的勝利という形で幕を閉じたものの、その期間、トリョフレチエのロシア系移民は深刻な被害を受けることとなった<sup>(27)</sup>。一説によれば、この時の赤軍による軍事行動の結果、トリョフレチエでは約150人の住民が犠牲になり、ハルビンに大勢の避難民が押し寄せたという。

この「トリョフレチエの惨劇」は、同地のコサックの反ソ感情を大きく高めた。ソ連メディアが同事件について徹底的に無関心の姿勢を貫いたことに対して、世界各地に亡命したロシア系移民は、メディアでの広報活動を通じてソ連の信用を失墜させることを目的として、ソ連による非人道的行為を——しばしばヒステリックなまでに激しく——書き立てた<sup>(28)</sup>。トリョフレチエのコサックたちは、このような世界中に離散した亡命ロシア人のネットワークと連綿な関係を有しており、たとえば上海のロシア人コミュニティは、「トリョフレチエの惨劇」に対して大きな反応を示した。同コミュニティは、たとえば周辺地域のコサック組合と連繋を取った上海ロシア系婦人救済委員会を通じて犠牲者のためのチャリティコンサートを催した他、時の米国大統領ハーバート・フーヴァーに対して電報を送信している。その目的は、曰く「罪無き人々に対する非人道的虐殺行為」の存在を世に知らしめ、「赤い死刑執行人がもたらす血染めの悪夢」に終止符を打つことにあり、その具体的文面は、「ソ連との国境地域では今、平和を愛し、武器を持たない何百ものロシア人農民

(26) I. Smetanin, "Russkii derevni za rubezhom," *Rubezh*, 06. 05. 1933, p. 12.

(27) 中ソ紛争については、拙著を参照されたい。Sören Urbansky, *Kolonialer Wettstreit: Russland, China, Japan und die Ostchinesische Eisenbahn* (Frankfurt: Campus, 2008), pp. 136–143. 中東鉄道については、麻田雅文『中東鉄道経営史：ロシアと「満洲」1896–1935』名古屋大学出版会、2012年を参照されたい。

(28) Nadezhda Ablova, "Deiatel'nost' beloemigrantskikh organizatsii v Kitae vo vremia obostreniia sovetsko-kitaiskikh otnoshenii (1929–1931 gg.)," *Problemy Dal'nego Vostoka*, no. 4 (2005), pp. 147–148.

が、老若男女を問わず、赤い殺人鬼たちによる組織的虐殺行為の犠牲となり、苦しみのうちにその命を落としています。戦争は起きていないはずなのです。にもかかわらず、何千という罪無き人々が、死と、そして破滅へと追いやられているのです。世界はなぜ、この現実を前に沈黙を続けるのでしょうか！」<sup>(29)</sup>という苛烈なものであった。

1931年9月、関東軍が満洲地方を占領した際に同地のコサックが示した態度は、まさにこうした不安、憎悪、そして絶望が混ざり合った1920年代末期の状況を念頭に置いて理解しなければならない。満洲地方の新たな支配者としてやってきた日本軍に対してトリョフレチエのコサックが当初抱いたのは、今後ポリシェヴィキによる襲撃があった場合には、日本軍による保護を受けられるであろう、また、日本統治下では従来 of 中国政権下におけるよりもリベラルな行政制度が導入されるだろう、という希望であった<sup>(30)</sup>。そのため、占領後ハイファに日本の管理局が設置されると、1932年12月23日、トリョフレチエのロシア系住民は代表団を派遣し、新たな「秩序と正義の時代」に対する歓迎と協力の意を明らかにした<sup>(31)</sup>。

しかし、満洲国内の少数民族に対して日本が採用した政策は、長期的には必ずしもトリョフレチエのロシア人たちの期待に沿うものではなかった。当初実施された措置は、人口の大部分を占める漢民族に対する牽制を目的としていたため、翻って少数民族に対しては友好的なものであった。軍閥政権下では否定されていた少数民族の自治権が承認され、文化的にも経済的にも広範な自由が保障されると、ロシア系住民はこれを好意をもって迎えた<sup>(32)</sup>。たとえば同時期にロシア語で執筆された満洲国のプロパガンダ文書は、満洲国におけるコサック社会の様子を、ロシア革命以前の「健康で自由な農民」の生活であり、対岸の「コルホーズで暮らす農奴たちの極貧生活」とは対極をなすもの、として最大の賛辞をもって描写している。以上は1943年にハルビンで開かれたコサック文化博覧会の紹介冊子中の一記事からの引用で、執筆者のM. シェスタコフはさらにこう続けている。

彼らは、ロシアの伝統的な家父長制的社会で、充足感と繁栄に満ち満ちた人生を送っている。農作業に精を出し、日常生活のあらゆる側面で手を差し伸べてくれる満洲国の利益、法、そして秩序に敬意を払いながらも、故郷とよく似た村の様子が思い出させるロシアの母なる大地の苦難を忘れる事はない。村の中で最も立地の良い場所に建てられた[ペトロ・パヴロフスク]大聖堂の、聖十字を冠したクーポールや尖塔が堂々と青天に聳える様を見上げては、

(29) GARF (Gosudarstvennyi arkhiv Rossiiskoi Federatsii), f. R-5963, op. 1, d. 39, l. 25–26, 55.

(30) 満洲国政府に対するロシア人たちの態度については以下の史料を参照されたい。US Department of State, Office of Intelligence Research, Office of Strategic Services, Research and Analysis Branch, ed., *Social Conditions, Attitudes, and Propaganda in Manchuria with Suggestions for American Orientation toward the Manchurians*, no. 295, 1942, p. 23.

(31) ハルビンのソ連総領事館によって作成された以下の資料を参照されたい。RGASPI (Rossiiskii Gosudarstvennyi arkhiv sotsial'no-politicheskoi istorii), f. 514, op. 1, d. 773, l. 56 obl.

(32) US Department of State, ed., *Conditions*, pp. 16–23.

彼らの慈悲深き第二の故郷・満洲国に、敬愛の念を抱くのである。<sup>(33)</sup>

しかし、こうした当初の歓喜は、満洲国政府による統制の強化とともに次第に収束していった。新たな管理体制の中核を担ったのは、1934年に設立された満洲国白系露人事務局である<sup>(34)</sup>。ハルビンの本局の他、各地に支局を置いた同管理局は、設立後まもなく満洲国内の全ロシア系住民に対して住民登録を義務づけた<sup>(35)</sup>。トリョフレチエのロシア系住民は、その大部分が、ハイラル区に設置された興安省支局によって住民登録されている<sup>(36)</sup>。1944年の住民統計によれば、満洲国には合計で68,887人の白系ロシア人が暮らしており、21,202人を擁する興安省は、39,421人を抱えるハルビンについて第二の規模であったことが分かる。トリョフレチエ全体では、興安省の白系ロシア人住民の約半数が居住していた計算になる<sup>(37)</sup>。

管理制度の強化は、ロシア系住民の一部に、反日感情の高まりをもたらした。管理局に期待された多くの役割の中でも特に重要だったのが、ロシア人移民社会におけるソ連シンの破壊活動の防止と、反ボリシェヴィズム思想の徹底であった<sup>(38)</sup>。この目的を達成するため、厳格な国境管理制度が導入された。1937年以降、トリョフレチエにおける移動と定住の自由が大幅に制限されると、遅くとも1940年代初頭までに、満洲国内のロシア系臣民がソ連国境地域に旅行・転居する場合には関連機関による事前の承認を得ることが義務づけられた<sup>(39)</sup>。また、不特定多数のロシア系住民が、主として政治的な理由から国境地域を強制退去させられている<sup>(40)</sup>。彼らの生活は日増しに外界から隔絶され、日常のあらゆる側面で監視されることとなった。満洲国政府による政策転換はロシア系住民の反感を買い、満洲国コサックによる1935年の暴動<sup>(41)</sup>や、ロシア人コミュニティ内部での度重なるレッド・パージ運動<sup>(42)</sup>を招く結果となった。

(33) Shestakov, "Trekhtrech'e" (前注20参照), pp. 194–195.

(34) これについて詳しくは、中嶋毅「満洲国白系露人事務局の創設1934–1935」中村喜和編『異郷に生きるV：来日ロシア人の軌跡』成文社、2010年、123–139頁を参照されたい。

(35) 事務局の支局は、ロシア人住民が居住する各村それぞれに設置された。GAKhK (Gosudarstvennyi arkhiv Khabarovskogo kraia), f. P-830, op. 2, d. 32, l. 37–39.

(36) 同事務局の統計資料によれば、1936年9月1日の段階で、すでに満洲里市のロシア人全人口の90パーセントが住民登録されていたという。GAKhK, f. R-830, op. 2, d. 13, l. 136–137.

(37) GAKhK, R-830, op. 2, d. 32, l. 18.

(38) 事務局に課された役割については以下の文献が詳しい。Sabine Breuillard, "General V. A. Kislitsin: From Russian Monarchism to the Spirit of Bushido," *The South Atlantic Quarterly* 99, no. 1 (2000), pp. 128–131.

(39) GAKhK, f. R-830, op. 1, d. 204, l. 11–12.

(40) たとえば、満洲国白系露人事務局のトリョフレチエ支局所長V. セルゲイェフが、ハルビン本局の第3セクション部長に宛てたGAKhK, f. R-830, op. 1, d. 270, l. 81.には、トリョフレチエから強制退去させられたグリゴリー・クーディンなる人物のケースが記録されている。

(41) 1935年、ティルパッハ将軍が満洲国政府によりコサックの新たな指導者に任命されると、これに対してコサック住民の一部が反乱を起こし、将軍およびその配下の士官、兵士の数名を殺害したとされている。詳しくは次の文献を参照されたい。Zhernakov, *Trekhtrech'e* (前注13参照), p. 3.

(42) 1938年、満洲国とソ連の国境紛争が激化すると、同地のロシア人約100名が、「ソ連のスパイ(通蘇)」ある

ロシア系住民内部での反日感情の高まりに対して、満洲国政府は反ソプロパガンダの徹底で応じている。ターゲットとして選ばれたのは主に若年層で、管理局による数々の講演、討論会、教育プログラムが実施された。その様子はソ連における喧伝活動と極めて類似しており、たとえばドラゴツェンカでは、「コサック青年の会」なる団体が、「コサックの家」と名付けられた施設で定期的に集会を開催している<sup>(43)</sup>。また、この時期に行われた祝祭日の式典の様子を見ると、そこには国境地域における厳格な統制と、民族協和プロパガンダの一翼を担うべき白系ロシア人社会への期待が色濃く反映されていることが分かる。たとえば、満洲国の建国記念日にあたる3月1日には、トリョフレチエの全ロシア系住民に対して記念日を盛大に祝うよう要請がなされている。彼らは午前10時にドラゴツェンカの自治体施設前に集合させられた後、関東軍司令官など日本人高官による演説への参加を求められた。祭事はさらにいくつかの政治的スピーチを経て夕方まで続き、討論会を以て締めくくられることが通例だった<sup>(44)</sup>。

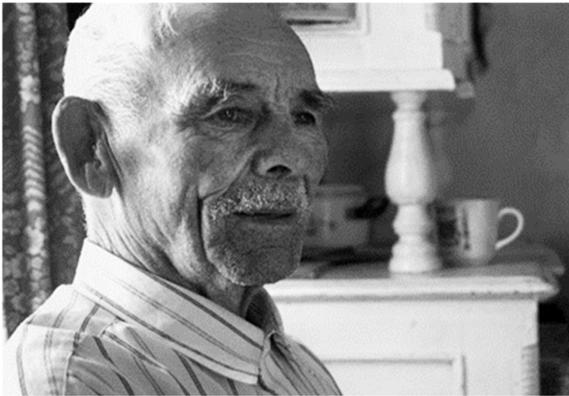


図2 イヴァン・ソコロフ氏  
アバイトウイの自宅キッチンにて  
出典：ゾーレン・ウルバンスキー撮影  
(アガバイドウイ、2009年8月)

トリョフレチエのロシア人コミュニティは、1945年8月のソ連赤軍による満洲侵攻と日本の敗戦によってさらなる波乱を迎えることになる。ソ連赤軍が満洲地方を——彼らの言葉を借りれば——「解放」すると、これに続く形でNKVDの部隊が次々とトリョフレチエに到着し、同地の男性人口の四分の一にあたるコサックと「30年代野郎」の大部分を、直ちに抑留し、収容所へと強制送還した。残された住民にはソ連旅券が支給された。例年のない豊作に恵まれた1949年秋の収穫期が過ぎると、

ソ連政府は、国境沿いの満洲里市に置かれたソ連総領事館主導の下、トリョフレチエ・コサックの中に隠れたクラークの粛清に乗り出した。住民の大部分は処刑を免れたものの、財産は没収され、家畜の大部分が屠殺された。その後、カザフスタン方面への引揚げが実施され、1955年から1956年の最終引揚げをもってロシア系住民の大部分が同地を去ると、放棄されたロシア人家屋には中国系移民が移り住むこととなった。ソ連へ引揚げずに残留したわずかなロシア人たちは、1962年に中国政府が出国を許可すると、オーストラリアや

いは「満洲国の敵(反満抗日)」として逮捕、拷問、場合によっては殺害されたという。額爾古納右旗志編纂委員会編『額爾古納右旗志』内蒙古文化出版社、1993年、692頁を参照。

(43) “Vecher kazach’ei molodezhi,” *Vremia*, 24. 03. 1944, p. 4.

(44) “Godovshchina osnovaniia imperii,” *Vremia*, 24. 03. 1944, p. 4.

ラテン・アメリカ諸国の査証を獲得し、海外へ移住していった<sup>(45)</sup>。その後も若干のロシア人が残留していたものの、1960年代末期に中ソ関係が悪化すると、彼らはその波及を恐れ、ソ連領土へ逃れたという。たとえば著者がインタビューする機会に恵まれたイヴァン・ソコロフ氏の両親は、革命以前から中国領に牧畜用の小屋を所有しており、ロシア革命が勃発すると、混乱を逃れてトリョフレチエに移住したという。ソコロフ氏自身は1927年にヴェルフ・ウルガ村に生まれ、日本敗戦以降も同地に留まっていたものの、1970年に妻と八人の子を連れてトリョフレチエを離れ、アルグン川をさらに南西に下ったソ連領内に位置するコサック村、アバガイトウイへと移り住んだそうで、ソ連旅券を所有していたおかげで、中国における文化大革命の最盛期においても、赤衛兵たちは一家に「指一本触れることができなかつた」という。これに対して、ロシア人と中国人の夫婦の子として生まれた人々が辿った運命は悲惨なものだった。彼らはスパイとして糾弾されただけでなく、残忍な暴力行為に曝され、中には拷問の最中に命を落とし、「遺体は井戸に捨てられた」人さえいたという<sup>(46)</sup>。事実、ロシア人との混血児として生を受けた楊玉蘭（ロシア名：タマラ・エレヒナ）女史は当時を振り返り、恐怖に顔を歪めながら、「あの頃は、ロシア語を口にすることすらできなかつたんですよ」と筆者に語った<sup>(47)</sup>。

以上のように、満洲国における帝国主義競争の歴史を概観すると、国境地域のロシア系住民と日本帝国のアンビバレントな関係が浮かび上がってくる。満洲国による統治開始後まもなく両者の間の不信感は隠しようのないものとなっていたが、ロシア人にとって日本帝国はソ連や中国の支配から逃れるための必要悪ともいえるべき存在であった。一方、日本帝国にとってのトリョフレチエ・コサックは、「民族的協和」や「寛容性」という満洲国のポジティブなイメージを喧伝するための絶好の表看板であった。その理由はまさに、彼らがアジアにいながらコサックの伝統を維持し続ける異質な存在であった点にあった。こうした事実は、以下で満洲映画協会作品を解釈する際の、一つの重要な立脚点となる。

### 3. 映画スターとしてのコサック

以上のような背景を踏まえた上で、ここからは、冒頭のコサック映画が製作された背景を考察していく。1939年に撮影されたこの映画は、約13分という短い放映時間に、大きく分けて、トリョフレチエの景色、平原での昼食、穀物の収穫、チーズ作り、聖体儀礼、家での食事、祭日の踊り、そして訓練演習という八つのシーンを映し出し、最後に、ロシア語で「おしまい」を意味する「カニェッツ」の文字が表示される。以下、その描写を確認し

(45) Kaigorodov and Perminov, “Zemlia za Argun’iu” (前注16参照), p. 6; Argudiaeva, “Russkoe Naselenie v Trekhrech’e” (前注7参照), p. 133; Zhernakov, *Trekhrech’e* (前注13参照), p. 4; 筆者によるイヴァン・ソコロフとのインタビュー（アガバイドウイ、2009年8月）。

(46) 筆者によるイヴァン・ソコロフとのインタビュー（アガバイドウイ、2009年8月）。

(47) 筆者による楊玉蘭（タマラ・エレヒナ）とのインタビュー（エンヘ、2009年8月10日）。

たい(付録のステール写真を参照されたい)。第一部は、馬が刈り取り機を引く様子から始まり、ロシア人農家の収穫技術が示される。そして小麦の穂がトリョフレチエの豊かな土壌を象徴するかのよう映し出される。冒頭で紹介したように、収穫をしていた農家が昼食休憩を取る場面では、手前に中国人の農夫を確認することができる。第二部では、農村の日常生活を見ることができる。農夫がミルクを運んでいるシーンから始まり、これはチーズやバターになる。そして家族が食事を共にする場面が映し出される。第三部は農村における宗教生活を描き出している。すなわちロシア正教の礼拝のシーンである。そこには、まず主教の姿、それから地方教会の建物、礼拝の参加者の様子が写り、最後に聖歌の合唱で終わる。第四部では伝統的なコサック文化を見ることができる。コサックダンス、祭りの音楽から始まり、ロシアと満洲国の旗を掲げた軍事パフォーマンスで終わるのである。

監督名が「高原富士郎」であることが分かっているが、具体的な製作過程については不明な点が多い<sup>(48)</sup>。しかしながら、当時の日本帝国の映画市場の動向を探ることによって、このコサック映画の位置づけを浮き彫りにすることが可能である。そこで、以下ではまず、満洲国における映画の歴史を概観しよう。

北満洲の映画業界における最大の転換点は、1937年の満洲映画協会設立であった。1930年代中頃までの満洲映画市場は比較的にリベラルで、たとえばハルビンのロシア系・中国系映画館では、主力のハリウッド映画のほか、当時まだ黎明期にあった中国系スタジオの作品や、その他の外国産長篇映画が上映されていた<sup>(49)</sup>。しかし、満洲映画協会が設立されると、ロシア語や中国語の字幕がつけられた日本やドイツ、イタリア産の作品が奨励され、従来のアメリカ産、中国産の映画はたちまち駆逐されることとなった。この転換の背景には、映画への関心が高まった事実があった。とりわけ1937年以降の日本帝国領の急速な拡大に伴い、「大東亜共栄圏」という日本の構想を新占領地の住民に対して効果的に伝達する手段が必要とされたためである。とりわけ満洲国は、大東亜共栄圏の実現を模索する日本政府にとって「実験場」として機能し、新たな植民地政策を実施する際には、先駆的役割を演ずることが期待された<sup>(50)</sup>。満洲映画協会は、つまり、こうした日本の国策の文化的側面における主たる担い手であった<sup>(51)</sup>。これは同社の資本構成にもはっきりと表れている。資本金の50パーセントが満洲国政府自らによって準備されたほか、残り半分を出資した南

(48) 伊賀上「日本人の三河コサックイメージ」(前注9参照)、46頁。

(49) Lahusen, “Fu Manchu” (前注3参照), pp. 147-155. また、清朝末期以降の中国における映画業界の動向については以下の文献で詳しく記述されている。Matthew D. Johnson, “International and Wartime Origins of the Propaganda State: The Motion Picture in China, 1897-1955” (PhD diss., University of California San Diego: 2008), pp. 25-156.

(50) 満洲国における帝国主義的ナショナリズムや、同国を民族国家として喧伝する政策、あるいは近代化政策の実験場としての満洲国については以下を参照。Prasenjit Duara, *Sovereignty and Authenticity: Manchukuo and the East Asian Modern* (Lanham: Rowman & Littlefield, 2003).

(51) 池川『満洲映画協会』(前注3参照)、99頁も参照のこと。

満洲鉄道株式会社は、周知の通り日露戦争以降日本の中国における植民地政策の中核を担った存在だった。同時期に満洲で発行されていた英語雑誌「マンチュリア」は、同地の映画業界を取り上げた特集号の中で、満洲映画協会の設立の趣旨が、教育的、文化的、また娯楽的に優れた作品を製作、配給することにより、「金銭的利益のみを追求した下劣で如何わしい」従来の作品を駆逐し、「国民精神の発揚と国民教育の振興に資する」点にあったことを言明している<sup>(52)</sup>。設立後まもなく首都である新京に複数のスタジオを設けた満洲映画協会は、以上のような目的を達成するため、たちまち満洲国内で上映される全ての映画の製作、配給を一手に担うようになった。映画館のない地方都市や農村部では巡回映写を行うことで、大都市以外でも日本をはじめとする枢軸国映画の普及に努めた<sup>(53)</sup>。また、自作の映画には満洲出身のスターを数多く起用したほか、独自の映画雑誌を発刊し、日本本土のみならず、ドイツやイタリアにも作品の紹介、配給を行った<sup>(54)</sup>。つまり、満洲映画協会は、いわば本土外から日本映画業界を牽引した半独立の組織であり、上述のように明示された目的に加えて、傀儡政権であった満洲国のマイナスイメージを払拭し、日本国内、また国際社会に対してその肯定的な国家像を喧伝するという役割をも担っていたとすることができる<sup>(55)</sup>。

では、具体的にはどのような作品が製作されたのだろうか。映画というメディアの重要性が高まるのに伴って日本帝国各地で検閲制度が強化されたが、満洲国もその例外ではなかった<sup>(56)</sup>。こうした状況下で撮影された映像作品は、大きく「娯楽映画」と「ノンフィクション映画」という二つのカテゴリーに分類することができる。第一のカテゴリー、「娯楽映画」には、主として日本の帝国主義、あるいは大東亜共栄圏思想に従って理想化された日満関係を、特定の様式に囚われずに様々なジャンルの技法を用いて描いた諸作品が含まれる。これらは一般に「親善映画」と呼ばれ、娯楽とプロパガンダの性質を併有するものだった<sup>(57)</sup>。一例として、島津保次郎監督の「私の鷲」を挙げることができる。この映画は、全体としては典型的なメロドラマの形を取っているものの、満洲に蔓延る悪しき漢民族に翻弄される無力な白系ロシア人とその日本人養女を主役としているという点では、満洲の錯綜した歴史を描き出すことに成功していると言えなくもない<sup>(58)</sup>。一方、第二のカテゴリー「ノンフ

(52) “The Manchuria Motion Pictures Corporation: Its Structure and Work,” *Manchuria* 4, no. 15 (20. 07. 1939), pp. 5–6.

(53) 都市部以外の地域における「教育」や娯楽としての映画の普及を特に促進させたのは、安価で持ち運び易い16ミリフィルムの登場だった。“The Manchuria Motion Pictures Corporation,” pp. 6–7.

(54) “The Manchuria Motion Pictures Corporation,” pp. 5–6.

(55) 第日本帝国の映画業界において満洲映画協会が比較的独立性の高い地位を保っていた点に関しては、以下を参照されたい。Baskett, “Hunting” (前注3参照), pp. 123–128.

(56) ドイツをモデルとした日本帝国の映画検閲については、次の文献が詳しい考察を行っている。Kurasawa Aiko, “Propaganda Media on Java under the Japanese 1942–1945,” *Indonesia* 44 (October 1987), pp. 66–71.

(57) Baskett, “Hunting” (前注3参照), pp. 128–138.

(58) 同作品が映画館で上映されなかった理由は、恐らくはこうした側面にあったのではないかと推測される。同作品の詳細な内容紹介およびその解釈については以下を参照されたい。Lahusen, “Fu Manchu” (前注3参

アクション映画」に属するのは、法律により娯楽映画の上演前に上映することが義務づけられていた、いわゆる「文化映画」である<sup>(59)</sup>。これは、「満洲国内の大衆の啓蒙」、「同国に居住する五族協和の促進」、「同国内の大衆に対する国策の指導」、「全国規模での反共運動の牽引」などの14の目的のために製作された諸作品を指し、トリョフレチエのコサックを取り上げた問題の映画もその一つとして捉えることができる<sup>(60)</sup>。

以上の概観した背景を鑑みれば、コサック映画の様式、目的、潜在的観衆について、以下のような三通りの解釈が可能である。第一の説は、同映画を、満洲国を構成する不可分の要素としてのロシア系コサックを描写した作品と解する。この解釈のキーとなるのは、日本の帝国主義的レトリックにおける満洲国の位置づけである。周知のように、満洲国は実質的には日本の傀儡政権だったが、日本人指導層の理解に従えば、それはあくまで植民地ではなく、独立国であった。そのため、満洲国住民を統治するにあたって従来の「被植民者」の隷従を正当化するスローガンを掲げることができず、彼らの汎アジア思想は不可避的に日本指導の下での「民族協和」を謳うイデオロギーとならざるを得なかった。しかし、結果的には事実上の宗主国としての日本の立場とレトリックとしての民族協和の矛盾は克服されず、民族を超えた「満洲国」という単位でのナショナリズムを勃興させることを目指した日本人指導層の努力が実ること、ついになかった<sup>(61)</sup>。加えて、欧米列強に対抗して「大東亜」における民族協和を実現するという思想は、複雑な民族構成をもった満洲国では特別の問題を生じさせた。満洲国では、「五族協和」が高らかに謳われたが、ここにいる「五族」とは、「漢民族」、「満洲族」、「モンゴル族」、「回族」に、単一民族としての「日本人と朝鮮人」を加えた東アジアの五民族のみを指し、「白系ロシア人」は除外された。そのため、彼らの存在は公式のプロパガンダにおいてほとんど無視され、満洲国内のロシア語メディアで時たま取り上げられるに過ぎなかった。このように考えれば、トリョフレチエのコサックを扱う問題の映画は満洲国内に居住するロシア系移民を観客として製作されたものである、という解釈が信憑性を帯びてくる。エンドロールの後に表示される「おしまい」の文字がロシア語で綴られている理由も、自ずと理解できよう。さらに大胆な仮説を立てるならば、同作品の主たる目的は、トリョフレチエから数千キロ以上離れたハルビンの大規模なロシア人コミュニティで暮らす白系ロシア人に対して、国境地域でのコサックの生活がいかに素晴らしいものであるかを伝えることにあったと考えることができるかも

照), pp. 155–158; ポダルコ・ピョートル「亡命ロシア人と映画：銀幕の歴史を踏まえて」中村編『異郷に生きるV』(前注34参照)、311–318頁。

(59) 娯楽映画に先立つ文化映画の上映は、日本本土においては遅くとも1939年の映画法施行にともなって義務化されているが、これがインドネシアやその他の日本占領地にも導入されたのはさらにそれ以降の時点である。Kurasawa, “Propaganda” (前注56参照), pp. 67–68.

(60) Hidaka Noboru, “Cultural Films in Manchoukuo,” *Manchuria* 4, no. 15 (20. 07. 1939), pp. 22–32.

(61) 日本における汎アジア思想については以下の文献を参照されたい。Tamanoi, “Introduction” (前注2参照), pp. 10–15; 松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか：記憶・権力・価値』ミネルヴァ書房、2013年。

しれない。無論、これは推測の域を出ない仮説だが、同映画の各シーンを、当時ハルビンで発行されていたロシア語雑誌『ルベージュ（境界）』に掲載されたトリョフレチエのコサックに関する好意的な記事やそのイラストレーションと比べてみると、両者の間には多くの共通点を見出すことができる。たとえば、イラストの下に付された「お祭りの季節、元氣よくかき鳴らされるアコーディオン。コサックの少年たちは、その音に合わせて踊るのが大好き！」といった類いの説明文は、映画中の祭りのシーンにそのまま転用しても、まったく違和感ないであろう<sup>(62)</sup>。

第二の説は、問題のコサック映画を、満洲以外の日本の諸植民地で広く行われた映像作品によるプロパガンダの中に位置づける。1942年3月の占領以降のジャワ島での日本のプロパガンダ活動を考察すると、第二の見解を裏付けるいくつかの事実が浮かび上がってくる。ジャワ島では、1942年から日本によるドキュメンタリー映画、文化映画、ニュース映画の製作が始まった。まず、これらの大部分が10～20分と短い作品であるという点に、コサック映画との類似点が見出せる。また、ジャワ島の映画館で娯楽映画に先立って上映された短篇映画は、今日の報道番組とは違い、同社会で起きた事件を報道することを目的とはしておらず、その主眼は、特定の政治機関や社会組織の活動内容や生産力の向上というような帝国全体にかかわるテーマを取り上げることで、植民地住民の教化と啓蒙を行うことに置かれていた。そのため、中には今日のマルチメディアによる教育テレビや教材とも似た、農耕や製織に関する技術の指導を意図した作品が数多くあり、問題のコサック映画も同列に解釈することが可能である<sup>(63)</sup>。事実、1939年までに満洲映画協会が製作した映像作品を広く分析すると、満洲国内諸地域の農耕牧畜、自治体や農業組合の構成、農村や都市部での生活などを取り上げた諸作品は、その他の植民地で撮影された映画と非常に多くの共通点を有していることが分かる<sup>(64)</sup>。

第三に考え得るのは、同作品が、日本の民俗学者や文化人類学者による研究の一環として製作されたという可能性である。戦前、戦中の日本人研究者は三河地域の白系ロシア人について膨大な数の論文、研究誌を遺している<sup>(65)</sup>。たとえば、当時、南満洲鉄道株式会社が発行していた数ある学術誌の一つに「北満三河露人の住宅と生活」と題された1943年付けの研究冊子がある。その序文は、偏見的な見方を含んではいるものの、同地のロシア人を

(62) たとえば満洲地方におけるコサック共同体の成立過程を解説した Smetanin, “Derevni” (前注26参照), pp. 12-13; 新政権下でのコサックの「満ち足りた生活」を描写した A. Arsen'ev, “V kazach'ikh stanitsakh po etu storonu Arguni,” *Rubezh*, 25. 02. 1939, p. 13; “V prostorakh tsvetushchago Trekhrech'ia,” *Rubezh*, 27. 09. 1941, pp. 8-10を参照されたい。

(63) ジャワ島で製作された日本のプロパガンダ映画の性質、および撮影された全作品リストについては以下を参照。Kurasawa, “Propaganda” (前注56参照), pp. 73-75, 102-106.

(64) 満洲国で撮影された映画の主たるテーマは、以下に列挙されている。“The Manchuria Motion Pictures Corporation” (前注52参照), p. 7. また、1939年までに製作された「文化映画」作品については、以下の文献中の表を参照されたい。Hidaka, “Films” (前注60参照), pp. 23-32.

(65) これについてさらに詳しくは、伊賀上「日本人の三河コサックイメージ」(前注9参照)を参照されたい。

贅辞とともに次のように描写している。

現在こそ酪農三河として有名になつてゐるが、[三河地域のロシア系住民が]二十數年間建設の爲に歩んで來た道は決して坦々たる平道ではなくして茨の道であつた。彼等がよく今日を爲したのはスラブ民族特有のネバリによることを見逃してはならない(中略)環境や生活慣習が異なるため、そのまゝ採り込むことは困難であるとしても、北方寒地の生活における長い経験は一應尊重せねばならず、農業に生活に多くの示唆が存在するので、徐々ながら北方の氣候風土に順應するやう彼等の長所は採り込まねばならない。日本開拓民に現在最も缺けてゐるものは[北方地域における]生活指導の點である。<sup>(66)</sup>

この記述は、少なからぬ日本人研究者が、トリョフレチエの白系ロシア人の生活様式の中に、過酷な自然条件下での生存および生産活動の模範例を見出していたことを示している。彼らは、同地のコサックの知見から学ぶことが、日本人農民による満洲への——最終的には挫折した——大規模な移民計画を成功させる鍵だと考えていたのである<sup>(67)</sup>。たしかに、宗主国について発展を遂げた「普遍的近代国家」と見なし、「旧態的で未発展」な植民地社会と位置づける植民地主義的な進歩史観、あるいは「文明化の使命」といった思想は何も西洋だけに特別なものではなく、日本についても当てはまる。それどころか、民族誌的、人類学的フィールドワークの実施は、日本の満洲植民における喫緊の問題であつたと見ることもできる。なぜならば、第一には、植民地支配を正当化するレトリックを作り上げるためには、植民地社会の実情に対する正確な知識が必要であつたため、また第二には、統治機関を設立、運営するにあたって、既存の生活慣習、労働文化、行政システム等の理解を得ることが望ましかつたためである。事実、日本人学者による諸研究は、日本帝国の植民地経営に多大な成果をもたらしている。しかしながら、こうした結果だけを理由に民俗学者や人類学者を単なる「国家のプロパガンディスト」として一括りにするのは、やや短絡的に過ぎよう<sup>(68)</sup>。彼らが遺した研究を数えると、亡命ロシア人や中国、ソ連の専門家の手による出版物の総数よりも多いことが分かる。日本の民族誌家、農学者、経済学者、あるいは結核研究者たちは、わずかに数千のロシア系農民に、文字通り取り憑かれていたかのような印象を拭い得ない。何より驚くべきは、彼らの記述の正確さと、その細部へのこだわりである。トリョフレチエのロシア系住民の住宅構造や牧畜の態様、多様な食文化につ

(66) 南満洲鉄道株式会社北滿經濟調査所編『北滿三河露人の住宅と生活』博文館、1943年、2頁。

(67) 日本帝国の植民地および移民政策の詳細に関しては次の文献を参照されたい。Louise Young, *Japan's Total Empire. Manchuria and the Culture of Wartime Imperialism* (Berkeley: University of California Press, 1998), pp. 352-398.

(68) 帝国主義思想と理想主義的なアカデミズムは一般的に相性の良いものだと考えられる。一例として、日本軍による占領下の満洲地方で日本民俗学者が行つた調査内容を分析した次の研究を指摘したい。Thomas David DuBois, "Local Religion and the Imperial Imaginary: The Development of Japanese Ethnography in Occupied Manchuria," *American Historical Review* 111, no. 1 (2006), pp. 52-74. なお、このことは、日本民俗学者がアジアにおける日本の占領政策を正当化するために学者としての本分を失つたことをただちに意味する訳ではない。この点については、次の研究を参照されたい。Kevin M. Doak, "Building National Identity through Ethnicity: Ethnology in Wartime Japan and After," *Journal of Japanese Studies* 27, no. 1 (2001), pp. 1-39.

いて今日我々が持つ知識は、その大部分を戦前、戦中の日本人研究者に負っているのである。問題のコサック映画には、同様の学究目的を示唆する箇所がいくつもある。たとえば、わずか四分間しかない収穫の場面で同じような映像が繰り返される点は、同映画が農学専門家や日本からの新移民に知識や経験を伝える上で、文献を補填する役割を担っていた可能性を伺わせる。あるいは、コサック映画中の聖体儀礼のシーンでは、トリョフレチエでは女性が教会の左側に、男性が右側に立つ、とかなり詳細に立ち入った描写が行われている点などに注目すれば、民族誌的記録との共通点をいくつも見出すことができる。いずれにせよ、彼らの研究を「上から押し付けられた」帝国主義的プロパガンダとして切り捨てるのは早計に過ぎるだろう。そこでは、学際的研究の成果としての満洲国の文化的多様性が生き生きと描き出されている。

### おわりに

戦前・戦中の日本人は、故郷から遠く離れて異境の地に暮らすわずか数千の亡命コサックたちの生活に対して、極めて大きな関心を向けていた。それを象徴的に示すのが、冒頭で示した満洲映画協会による短篇映画であり、本稿はこれが撮影された背景を、帝国主義という観点から分析し、次のような三つの仮説を検討した。具体的には、

- (1) 満洲国内に暮らすロシア人に対して行われた、満洲国民としての自覚を促すためのプロパガンダの一環
- (2) ジャワ島などの日本帝国の諸植民地で行われたプロパガンダと同様の性格を有し、現地住民に対して日本帝国の精神的価値の喧伝、また生産力向上のための新技術の伝達を目的とした作品
- (3) 日本の専門家や満洲農業移民に対して、北方寒地での生活の実態を伝えるための学術的・教育的映画

以上の三説である。第三の説については、満鉄機関の刊行物についての調査から、三河地方が日本人にとって寒冷地適応のモデルであったこと、この地方ではコサック農業が自給自足農耕のモデルとなり、日本人開拓民のなかでロシア式農業・生活様式の完全導入が実施されたことを伊賀上が明らかにしている<sup>(69)</sup>。

ただし、真実はこうした三つの説を含めた複数の要素が組合わさったものであろう。本稿はこのうち、特に第一の説についてさらに述べてみたい。かつてロシア帝国の植民政策の担い手として辺境に配備されたコサックたちは、中国領へと亡命すると、たちまち植民地主義の被支配階級として苦境に陥ったものの、まさにそこが政治的中枢から離れた辺境の地であったことが幸いして、直接的統治を受けることがなかったため、少なくとも一定の程度において、伝統的な生活様式を維持することが可能だった。このような背景なくし

(69) 伊賀上「日本人の三河コサックイメージ」(前注9参照)、39頁。

て、亡命コサックの共同体が日本映画業界の注目を浴びることはなかったであろう。しかしながら、映画——とりわけ帝国主義を背景として撮影された作品——は、往々にして空想の産物であり、亡命コサックの共同体の「現実」を伝えるものは非常に少ないことを忘れてはならない。事実、満洲国における彼らの生活は、「民族協和」というスローガンにかかわらず、決して平穏無事なものではなく、植民地や領土の拡大を目的とした競争の影響に常にさらされ、満洲国白系露人事務局などの植民地機関によって、あらゆる面で間接統治を受けていた。にもかかわらず、スクリーンに映し出されるのはあくまで、親しみ深い帝国臣民としての、あるいは異国情緒と示唆に富んだ生活を営むロシア出身の武装農民という、極めてポジティブなコサック像である。彼らは、まさにこのように描き出されることによって、トリョフレチエやコサックの生活慣習という小さな地域や文化の枠組みを超えて、帝国主義を象徴する一つのマスメディア現象へと昇華されていると見ることができよう。あるいは、同映画において満洲における植民地統治の「現実」を最も良く示唆しているのは、民族衣装を身にまとい踊りながら行進するコサックではなく、むしろ中国人料理人がカメラへと投げかける東の間の深刻な眼差しであるのかもしれない。興味深いのは、20世紀前半の満洲地方の歴史における最も重要な登場人物であるはずの日本人が、カメラの前に全く姿を見せないという点である。このような映画の構成は、満洲国という傀儡政権を立ててその裏から政治を行った日本帝国の政治に通ずるところがある。

現在ロシアの公文書館に保存されている映画のオリジナル版にはロシア語によるナレーションが入っている<sup>(70)</sup>。これは満洲国時代に録音された音声であり、映画がやはり満洲国のロシア人に向けて制作されたことを窺い知ることができる。先述のように、ほぼ同時期に発行されたロシア語雑誌『ルベージュ』のトリョフレチエ・コサックの文化・生活についての特集記事と同じ文脈に位置づけることができよう<sup>(71)</sup>。雑誌『ルベージュ』も満洲国期においては、反ソの立場をとり、日本・満洲国への忠誠心を示していた<sup>(72)</sup>。この時期には、ロシア人を含めた住民の満洲国への忠誠心が課題となっており、帝政ロシア期と同じような文化を維持し、満洲国民として幸福で平和な生活を享受しているトリョフレチエ・コサックを「スター」として取り上げることで、他のロシア人にも満洲国民としての自覚を促すものであったと考えられる<sup>(73)</sup>。

(70) オリジナルは、ロシア国立映画保存所に保管されているフィルムで、9527（保管番号）ТРѢХРЕЧЬЕ。ロシア語による音声が取録されている。貴重な情報を提供してくださった査読者の方に感謝したい。著者ウルバンスキーはウラジーミル・クリャウス氏（脚注7参照）と面会し、同フィルムを閲覧し、音声は1939年に録音されたものであることを確認した（2017年7月27日、モスクワ）。なお、以下のサイト（<https://www.youtube.com/watch?v=rCx3j-r3qfY>）では映像の一部（約15分中の二分）と音声を確認することができる。

(71) A. Arsen'ev, "V kazach'ikh stanitsakh po etu storonu Arguni," *Rubezh*, 25. 02. 1939, p. 13; "V prostorakh tsvetushchago Trekhrech'ia," *Rubezh*, 27. 09. 1941, pp. 8–10.

(72) Olga Bakich, *Harbin Russian Imprints: Bibliography As History, 1898–1961* (New York : Norman Ross, 2002), p. 42.

(73) 特に独ソ戦期における満洲国の亡命ロシア人の祖国観、満洲国への忠誠心については中嶋毅「ある亡命ロシア人の半生：ハルビン・フォンドにみる在満白系ロシア人の世界」中嶋毅編『新史料で読むロシア史』山

## 追記

2009年8月、筆者(ゾーレン・ウルバンスキー)はエンヘ(ロシア語ではカラガヌ)を訪れる機会に恵まれた(エンヘの農家の建物について図3参照)。1921年に、金鉱を求めて河北省から同地にやってきた父親と、トランスバイカル地方の農村出身の母親との間に生まれたという村長のイヴァン・ヴァジリエフ氏(図4参照)は、ほかの「混血」住民と同じく、未だに中国語よりもロシア語を流暢に話す。そして朝食の時間になると、彼は絞り立ての牛乳と同地のロシア人たちが「リーバ」と呼ぶロシア式の黒パン「フレブ」に、瓶詰めのブルーベリージャムを添えて出してくれた。しかし、これはもはや、彼らが自分たちの生活のために行っているものではない。彼らは、ロシア式のサウナ「バーニャ」とぼっとん便所付きの田舎風ゲストハウスを経営しており、牛乳も黒パンもすべて、そのサービスの一環に過ぎなかった。ロシアの文化的飛び地とも言える同地は、普通の旅行に飽きた北京や西安の裕福な観光客によって「発見」され、またとない非日常を味わわせてくれるエスノ・ツーリズムの新たな名所として人気を博しつつあった。場所や時代が変わっても、異国への憧れがビジネスチャンスになることに変わりはないようである。以上の記述は、筆者自身が同地で受けた印象、および2009年8月9日および10日、エンヘにおいて筆者が行ったイヴァン・ヴァジリエフ氏 および 楊玉蘭(ロシア語名、タマラ・エレヒナ)氏とのインタビューに基づくものである。査読者の方より、最近の同地は田舎ながらも大きな建物への建て替えが進んでいるとの情報をいただいた。感謝を申し上げたい。



図3 エンヘのロシア人農家

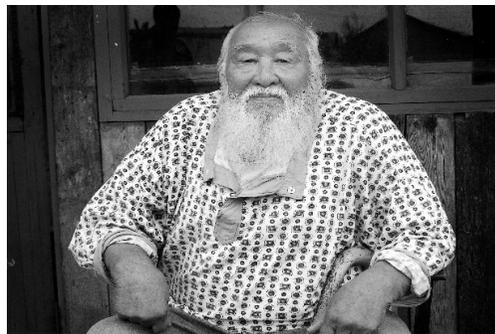


図4 イヴァン・ヴァジリエフ氏  
エンヘの自宅にて

出典:ゾーレン・ウルバンスキー撮影、2009年8月。

---

川出版社、2013年、179頁。満洲国のプロパガンダの動向については、Annika A. Culver, *Glorify the Empire: Japanese Avant-Garde Propaganda in Manchukuo* (Toronto: UBC Press, 2013); Norman Smith, *Resisting Manchukuo: Chinese Women Writers and the Japanese Occupation* (Vancouver: University of British Columbia Press, 2007)。

附録 映画『三河』のスチール写真<sup>(74)</sup>



第一部：馬が刈り取り機を引く様子から始まり、ロシア人農家の収穫技術が示される。そして小麦の穂がトリョフレチエの豊かな土壌を象徴するかのように映し出される。収穫をしていた農家が昼食休憩を取る場面では、手前に中国人の農夫を確認することができる。



第二部：農村の日常生活。農夫がミルクを運んでいるシーンから始まり、これがチーズやバターになることが示される。最後は家族が食事を共にする場面。

(74) 現在使用権を有している株式会社ケー・シー・ワークスにライブラリー使用申請を行い、スチール写真の使用許可を得た。



第三部：農村における宗教生活。ロシア正教の礼拝のシーン。まず主教の姿、それから地方教会の建物、礼拝の参加者の様子が写り、最後に聖歌の合唱で終わる。



第四部：伝統的なコサック文化。コサックダンス、祭りの音楽から始まり、ロシアと満洲国の旗を掲げた軍事パフォーマンスが映され、最後にロシア語で「おしまい」を意味する「カニェッツ」の文字が表示される。